ドイツ語

——ドイツ語百年史素描——

宮野悦義

一橋百年の歴史のなかで教科目としてのドイツ語が登場するのは、商法講習所から東京商業学校、さらに高等商業学校へと目まぐるしく変貌した明治一七年——二〇年の頃である。記録の上では明治一九年七月の東京商業学校教科一覧の高等科の部に、週六時間の独語学が記載されており、以後明治二〇年、同二二年の学科目改正にも引継がれて定着していくことになる。すでに商法講習所教則に最初の記録を見るフランス語の場合とは異なり、ドイツ語が教科目となるについては、明治一八年の東京外国語学校および同附属高等商業学校との合併がその機縁になったと考えられる。その前年、商法講習所の昇格と競い合う形で東京外国語学校に併設された附属高等商業学校には、同学校規則第三条として、当初から英佛独露支朝の外国語科目が記載されているからである。しかし、いずれにせよ実際にドイツ語教育が開始されるのは、学科課程の改正に明け暮れたこの変動期を過ぎ、高等商業学校に予科・本科の体制が定着した明治二二、三年頃と思われる。

この一橋ドイツ語教育草創期の担い手としては、エミーリオ・ビンダ氏の名がただ一人記録に残るのみであ

る。イタリア人ビンダ氏はドイツ語のほか、明治二二年の学科目改正で新たに加わったイタリア語、同二七年に加わったスペイン語とを合せて三ケ国語の教育を担当された。途中ごく短期間、法学者の高木甚平氏、兼任講師として学習院の山口小太郎氏がドイツ語を担当されるが、ビンダ氏は明治三四年まで、ほぼ十年にわたってその職にあった。

東京高等商業学校となる明治三五年を境として、一橋のドイツ語教育、教授陣容も充実の兆を見せ始める。この頃、いわば初のドイツ語専任担当教官として、雪岡重太郎氏が着任する。雪岡氏は第一高等中学校を中退後ドイツ語研修に専念、字書編纂、翻訳事務に従事し、逓信省・文部省を経て明治三五年に東京高商助教授兼書記として本学のスタッフとなる。ドイツ語を教授するかたわら、入試委員、会計主任、収入官等の学内の役職を歴任し、大正八年に死去されるまで多面にわたって本学のために尽された。

同じ頃、兼任講師として東京外国語学校教授の水野繁太郎氏が、七年にわたって教鞭をとられ、また、外国人教師はビンダ氏のあとを受けてリヒアルト・ハイゼ氏が着任、後述するように、実に二一年の長きにわたって本学のドイツ語教育のために尽された。

東京高商時代の後半には、ドイツ語教授陣に多彩な顔ぶれが加わる。本来的にはドイツ語教官の枠には納まらない各専門領域の教授たちが、一時期ドイツ語教官を兼担する形であって、本学独自のあり方として注目に値する。国際法の山口弘一、経済史の三浦新七、統計・保険学の藤本幸太郎の三氏がその例であるが、いずれもそれぞれの学問領域で詳述されるべき大学者であり、本稿では事実を指摘するにとどめる。なお、これと時を同じく

して、山田伊三郎、武内大造、辻高衛の各氏を東京外国語学校より兼任講師として迎えており、前記ハイゼ、雪岡両氏を合せて、ようやくドイツ語教育の充実期に入ることになる。

東京商科大学の時代に入るに先だって、ここで再度ハイゼ氏に触れておきたい。学問史というよりはむしろ人物史の領域に属するとしても、東京高商の全期間と、商大昇格後の教年間を通じ、一貫して本学のドイツ語教育に専念されたほとんど唯一の人物であり、また、如水会報の幾多の記事が示すように、この時期に本学でドイツ語を学んだ学生にとって、忘れ得ぬ良き師の一人であったからである。ハイゼ氏は一八六九年キール市の生れ、一九〇二年（明治三五年）に来日して東京高商および学習院で教鞭をとる。来日の斡旋は英語学の神田乃武氏によるものと言われる。当時の学生の回想によれば、ハイゼ氏は「亜麻色の髪、鋭い眼光、堂々たる体躯、悠々迫らざる風格」のゲルマン気質の典型であった。その教授ぶりは厳格そのもので、一度で学生の氏名を覚え、次回からは名指しで解答を求めたという。それだけにまた学生には想い出深い教師であったのだろう。大正一三年の帰国の後も多くの卒業生との親交があり、昭和一三年の日本再訪の折には、各地で盛大な歓迎の行事が催された。こよなく日本を愛されたハイゼ氏は一九四〇年（昭和一五年）に滞在中の北京で没、遺言により会津飯盛山に葬られ、同地には卒業生よりなるハイゼ先生記念事業会の手で銘碑が建てられた。

大正九年の商科大学昇格に伴なって、予科三年、本科三年の新しい体制を迎え、本学のドイツ語教育は予科を中心に一層の充実ぶりを示す。この頃、雪岡氏に続くドイツ語専任教官として金子弘氏、兼任講師として田代光雄、久保春海の両氏を新たに迎える。金子氏は大正一一年に予科助教授として着任、昭和一一年までドイツ語教

育に従事される。その間、昭和二年から同五年までベルリンに留学するが、「独語及び独語教授法研究」の名目では恐らく本学最初の留学であろう。しかし、金子氏の研究領域はむしろ産業心理学ともいうべき分野にあり、昭和七年には同名の著書を高垣寅次郎氏との共著で発表している。他方、久保春海氏は大正一一年から予科、専門部の講師として教鞭をとり、その後同一四年以降は専門部教授として、専門部を中心に昭和一八年までドイツ語教育に従事された。

大正一四年、本学のドイツ語教授陣に吹田順助氏を迎えたことは、一橋ドイツ語百年の歴史のなかでも、特筆すべき出来事といわねばならない。初めての独文出身者であり、しかもこの分野ですでに多くの業績を挙げていた吹田氏の着任は、本学の従来の伝統にさらに新たな展開を促すものであった。それは氏が本科で担当したドイツ文芸思潮に関する講義にとどまるものではない。恐らくは予科のドイツ語教育もまた一つの転機を迎えて、それまでにない深みと広がりを得たであろうことは想像に難くないのである。

吹田氏は一高、東大を卒業後、東北大予科、七高、山形高教授を経て商大予科教授、本科助教授となる。昭和五年には本科教授、同一二年には図書館長の要職につき、同一九年の退官まで予科、本科のドイツ語、ドイツ近代思潮史を担当、本学のドイツ語・ドイツ文化研究に大きな足跡を残した。ドイツ語関係教官の名誉教授第一号であることも付言したい。吹田氏の研究領域および業績は、フリードリヒ・ヘッベルの翻訳・紹介、ゲオルク・ブランデスやマックス・シェーラーの文学史の翻訳・研究、その他『ゲーテと東洋』を初めとするゲーテ研究等、極めて広範かつ多岐にわたるが、個別の作家・作品研究を超えた近代ドイツ文芸思潮研究という呼称で総括することができよう。事実、商大本科における氏の講義題目も同様であった。因みに昭和六年の氏の講義要項の

一端を紹介しよう。

獨逸近代思潮史　毎週二時間

教授　吹田順助

先ヅ研究ノ方法（思潮史的様式的方法）ニ就イテ概観シ、本論トシテハ

一、一七世紀（バロック時代）

二、一八世紀（啓蒙思潮、ロココ時代）

三、自一八世紀末葉、至一九世紀初葉（シュツルム・ウント・ドラング、古典派、浪漫派）

四、一九世紀中葉（写実主義ノ時代）ノ社会思潮、哲学、文学、時代ノ様式ヲ論述シ、以テ各時代ノ構造関係ヲ考察スルコトニシタイ。

この講義は後に「獨逸近代思想史」と名を変え、一時期は三浦新七氏との連繋のもとで開講されるが、いずれにせよ一七世紀から一九世紀中葉に及ぶスケールの大きいドイツ精神史、文化史の講義であった。その内容については、この間の研究の集約と思われる吹田氏の主著『近代獨逸思潮史』（学位論文、昭和一五年京大）、および戦後公刊された『ドイツ文学序説』からも推察できよう。

一方、吹田氏はまた随筆の名手として学内外の新聞や雑誌に健筆を揮われた。専門のドイツ文学にかかわる重厚な作品から広範な交友の記録、はたまた軽妙な歌舞伎談と、その題材は多岐にわたるが、いずれも氏の闊達な人柄を偲ばせる味わい深い作品である。これらは『緑野抄』（昭和十年）、『果物皿』（昭和一六年）、『分水嶺』（昭和三七年）等に収録、公刊されている。

吹田氏とほぼ同時期の予科ドイツ語教授陣には、新たに長谷川禄三郎、安楽直治、中村健一郎、神保謙吾の諸氏が兼任講師として加わる。このうち神保氏は昭和一〇年、専任予科教授となり、昭和一八年旧制八高に移られるまで、予科ドイツ語教育の中心的役割を担われた。同氏は吹田氏に次ぐ二人目の東大独文出身の教官であり、ドイツ中世文学研究にすぐれた業績を残された。

昭和一〇年以降、先に述べた東京高商時代後半におけるような、本学独自のドイツ語スタッフが予科の教壇に立つ。社会学の高島善哉、哲学の本田謙三、太田可夫、倫理学の藤井義夫、法制史の町田実秀、経済地理の江沢譲爾の諸氏がそれで、いずれも大正末期から昭和初期にかけての本学出身者である。後年それぞれの学問分野において大きな足跡を残したこれら諸氏については、前述の場合と同様に別稿で紹介されるべきものと考える。このなかでは町田氏のドイツ語教授歴がもっとも長く、新制移行期まで教鞭をとられたことを付言しておく。

昭和二四年、新制一橋大学に移行し、前・後期四年、しかも四学部体制が発足するに及んで、本学の語学教育および同担当教官の構成にも大幅な変化が生ずる。特に旧予科時代にスタッフの相当部分を広義の社会科学系教官が占めていたドイツ語の場合、その変化は顕著であった。この時以降、ドイツ語教育の担当はドイツ語ないしドイツ文学を専門領域とする独文出身の教官に移行するのである。

新制移行およびそれに続く時期に、前期小平分校を中心とするドイツ語、後期国立本校のドイツ文学関係の講義を担当されたのは、前述の町田氏を除けば、多田鉄雄、関泰祐、大畑末吉、登張正実、敏田敏郎の諸氏、および非常勤講師として大成龍雄、相沢博、土井義信、斉藤栄治、北通文、丸山武夫、金子栄一の諸氏である。

多田鉄雄氏は東京外語、東北帝大を卒業後、巣鴨高商教授、文部省教育調査部嘱託として勤務されるかたわら、昭和一一年より本学附属専門部講師としてドイツ語を担当された。その後昭和一九年には同専門部教授、新制移行後の昭和二九年には一橋大学社会学部教授となり昭和四四年退官されるまで長年にわたって教育行政学およびドイツ語を担当、学生の指導にあたられた。多田氏の研究領域はドイツを中心とするヨーロッパの学校教育制度および教育行政の比較考察であり、戦後の新学制発足に関連して貴重な調査資料、論文を発表された。また多田氏は早くから人間形成における幼児教育の重要性に着目され、この方面でも『幼児の教育』(フレーベル館)に多数の論文を発表しておられる。

昭和二五年は新制度発足二年目にあたる。国立本校はいわば東京商科大学としての最後の年を迎えていた。この年、『ヴィルヘルム・マイスター』をはじめとする重厚なゲーテの翻訳で知られる関泰祐氏が、吹田氏以後ひさびさのドイツ文学講義を担当される。ただ残念ながら関氏の在任は都合あって僅か一年にとどまり、この講義も集中講義の形にならざるをえなかった。しかし復活したドイツ文学講義は後任の大畑末吉氏に受け継がれ、新制一橋大学社会学部の講義科目として定着して行くことになる。

大畑末吉氏は一高、東大を卒業後、旧制新潟高校、山形高校、立教大学教授を歴任し、昭和二六年、一橋大学教授として本学に迎えられた。以後昭和四〇年に退官されるまで、本学ドイツ語スタッフの中心として、前期小平分校のドイツ語、後期社会学部のドイツ文学を担当、新制一橋大学におけるドイツ語教育および関連教科の充実・発展の礎を築かれた。

大畑氏はなによりもまずアンデルセン童話の紹介者として著名である。昭和一二年の『アンデルセン自伝』

（岩波文庫）に続いて、昭和一三年から二一年まで、八年の歳月を費やして訳出された『アンデルセン童話集』（岩波文庫）全一〇巻は、デンマーク語原典からの初の完訳として、画期的な意義をもつ業績といわねばならない。その後昭和二八年には同じく『絵のない絵本』、昭和三五年には『即興詩人』の翻訳、続いて前記『自伝』および『童話集』の改訳が行なわれて、大畑氏のアンデルセン紹介・研究の歴史は実に三〇余年に及ぶのである。アンデルセン関係以外の領域では、本学在任中に一橋論叢その他に発表されたユニークなゲーテ研究の諸業績に言及せねばならない。『若きゲーテの社会観』、『ゲーテとフランス革命』といった論文の標題が示すように、大畑氏の研究はまずゲーテをその時代との関連において捉えるところから始まり、その上でこの偉大な国民詩人ゲーテの全容に迫ろうとする。なかでもゲーテの創造の根底にあるものを鋭く追求した『ゲーテの芸術理論』、『ゲーテ哲学の根本問題』等の諸論文は注目に値する。これらはやがて昭和三九年の学位論文『ゲーテにおけるスピノチスムス』（『ゲーテ哲学研究』―河出書房―所収）に結晶する。また大畑氏はゲーテの数ある作品のなかでは特に『ファウスト』を愛され、幾度となくドイツ文学講義の題目に掲げられるとともに、数点のすぐれたファウスト論を執筆された。とりわけ高島善哉教授との会話を機に研究されたというエピソードをもつ好論『ファウストはなぜ盲目にならねばならなかったか』、ファウストの救済の問題に新たな解釈を打ち出した『ファウストは悲劇か喜劇か』はその白眉である。これらの論文は大畑氏の停年退官後、『ファウスト論集』（早大出版会）に収録され、前者ともども日本のゲーテ研究史に大きな足跡を残した。

登張正実氏は大畑氏と時を同じくして広島大学から本学に着任された。後年日本独文学会理事長を務められたドイツ文学界の重鎮の一人であり、ドイツ教養小説の系譜を辿るすぐれた業績を公にしておられる。ただし本学

での在任期間は二年であり、昭和二八年には東大文学部へ移られた。

植田敏郎氏は旧制広島高、東大を卒業後、旧制静岡高校、旧制東京外語、学習院教授を経て昭和二八年、本学ドイツ語スタッフの一員となられた。以後昭和四六年に退官されるまで、前期小平分校のドイツ語および後期社会学部のドイツ文学講義を担当され、前記大畑氏および後述する橋本氏とともに、本学のドイツ語・ドイツ文学の教育・研究に尽された。植田氏の研究領域は一八世紀のドイツ啓蒙思想であり、とりわけゴットフリート・ヘルダーであった。ゲーテに少からぬ影響を与えた文学者であり、また歴史哲学、言語理論の分野でも重要な思想家であるヘルダーに関して、植田氏は数多くのすぐれた論文を発表された。また、この難解な思想家の代表的な著作の一つ、『神についての会話』を訳出・公刊された（第三書房）功績も忘れてはならない。植田氏の業績はその他なお多岐にわたるが、長年の留学経験に裏づけられた無類のドイツ通としての一面にも触れたい。氏は昭和六年から一一年までベルリン、ボン、ウィーンの各大学に学び、ウィーン大学で学位を取得された。その後も幾度となくドイツを訪れて、その該博な知識はまさにドイツ博士と呼ぶにふさわしい。名著『ビール巡礼』からくるビール博士の異名は、その一面を表わすものでしかない。

橋本郁雄氏は七高、東大を卒業後、七高＝鹿児島大、熊本大助教授を経て昭和二八年に本学に着任された。橋本氏は本学では初めてのドイツ語学およびドイツ語史を研究領域とされる教官である。特に中世ドイツ語研究においてはわが国の中枢を占める学者の一人であり、内外の機関誌にも多数のすぐれた研究成果を発表されている。橋本氏は一八年にわたって本学のドイツ語教育に尽されたが、昭和四六年、学習院大学に移籍された。

既に名前のみを挙げた非常勤講師諸氏のなかでは、大成龍雄氏について一言したい。大成氏は東大文学部美学

科を卒業後、旧大倉経専＝東京経済大学教授として、美学およびドイツ語の講義を担当されたが、そのかたわら戦後まもない昭和二一年から、小平の旧制予科でドイツ語の教鞭をとられた。以後約二〇年にわたって本学ドイツ語教育のために尽された功績は、大いに多としなければならない。

外人教師ビンダ氏に始まった本稿は、やはり外人教師のフリードリヒ・グライル氏で結びたい。本学のドイツ語担当外人教師は、前述したハイゼ氏のあと、大正一五年から昭和五年にかけてベルリン大学出身の法学博士、テオドア・ステルンベルヒ氏が在任しておられるが、その後しばらくは空席になっていた。グライル氏は実に二〇年ぶりに本学が迎えたドイツ人教師である。

グライル氏は一九〇二年（明治三五年）に現在はドイツ民主共和国領のハルバーシュタットに生まれた。ドレースデンの美術学校を卒業後、東洋の地に憧れて一九二八年（昭和三年）に来日し、以後日本を第二の故郷として定住され、今日に及んでいる。氏は昭和八年から北大予科、五高、拓殖大学等でドイツ語の教鞭をとられたのち、昭和二五年に本学の専任外国人教師として着任され、昭和五二年まで実に二七年にわたって本学のドイツ語教育のために尽された。これは現在までのところ本学のドイツ語担当教官の最長記録である。大正期のハイゼ氏に比してその教授ぶりは必ずしも厳格ではなかったが、氏もまたこよなく学生を愛されて、新制一橋でドイツ語を学んだ卒業生には忘れられぬ懐しき師の一人であろう。やがて滞日六〇年を迎えるグライル氏の温顔を思い浮べつつ、一橋ドイツ語百年の素描を閉じることにしたい。